

パーソン・センタード・アプローチにおけるスーパービジョンの基本的考え方 — Lambers (2013) の紹介 —

関西大学臨床心理専門職大学院 中田 行重・小野真由子・構 美穂
中野 紗樹・並木 崇浩・本田 孝彰

要約

パーソン・センタード・アプローチ (Person-Centered Approach, 以後 PCA) ではどのようにスーパービジョン (Supervision, 以後 SV) を考えているのであろうか。本論文は Lambers (2013) を紹介し、それについて考察を行うものである。PCA では SV を、スーパーバイザー (以後、バイザー) の成長という点から考える。一般的な SV がケースの進展や管理、査定という視点から行われるのに対して大きな違いである。PCA の SV ではスーパーバイザー (以後、バイザー) はバイザーが自分自身に合ったセラピーのやり方を探るための、協働的探索を行う積極的なパートナーとして関わる。バイザーは教えたり、セラピスト (Therapist, 以後 Th) モデルを提供したりするのではなく、セラピーと同様に中核条件をバイザーに提供する。考察では、このような SV の意義を認めつつも、実際に Th 教育としてどの程度機能するのかを論じた。

キーワード：一般的なスーパービジョン、協働的探索、中核条件、潜在力信頼モデル

I. はじめに

パーソン・センタード・アプローチ (Person-Centered Approach, 以後 PCA) のセラピスト (Therapist, 以後 Th) 教育はどのように行われるべきだろうか？ 様々な場面へ PCA が適用されてきたが、その基本的考えは個人を尊重することである。PCA のセラピーの基本には、クライアント (Client, 以後 Cl) にとって最良の方向性は Cl 自身が最もよく知っているの、Th にとっての原則はその Cl の自律性を尊重すること、という考え方がある。また、PCA の様々な適用、例えばグループや組織運営においても、非指示的な態度による当事者の尊重という考え方がある。そう考えると、PCA における Th 教育も、学習者の自主性を非指示的に尊

重するということになるだろう。しかし、そのような考えで Th 教育が行えるだろうか？

Rogers, C. R. (以後、Rogers) がまだ大学生だった時、学生同士で議論することが自分たち学生にとって最も学びが大きいので、教師のいない議論の場を授業として認めてもらうように大学に交渉した、という有名な話がある。このような体験がすべて Rogers の非指示的療法や後のクライアント中心療法や PCA の考えに結実していく。ここには、その学生にとって大事な学びは内側から生まれるので学生には教えない、という考え方がある。しかし、臨床心理士という専門的な技能を持つ職能者の育成においては、どう Cl を見立て、どんな目標を定め、それに沿ってどうセラピーを組み立て、Cl にどう対応するか、ということの学びが必要と一般に

考えられている。それは、CI に対して、Th が自分勝手にやっていくのでは専門的な仕事とはいええないからである。実際の CI への関わり方の臨床感覚はベテランのスーパーバイザー（以後、バイザー）から教えてもらわないことには、初学者は分からないのではないか、と思える。そう考えると、PCA の考え方はスーパービジョン（Supervision、以後 SV）で通用しないように思える。しかし、PCA の SV においても PCA のこの哲学は生きている、というのが以下で紹介する Lambers（2013）の論考である。本稿はこれを紹介し、PCA の SV を考察するものである。

II. Lambers（2013）“Supervision” の紹介

一般的なスーパービジョンのモデル

SV は多くの場合、訓練中の Th に必須として課される。しかし一部の国では、訓練後も倫理上または資格保持条件として必要とされている。

SV に関する論文の多くは、一般的な SV モデルの観点から書かれており、その目的や機能、その実践方法を書いている。一般的な SV モデルとは、どの学派にも当てはまるモデルである。それらの論文は‘学派固有の（approach-specific）’SV はその‘学派主義者（purist）’にしかな役立たない、と考えているので、SV を固有の学派から切り離し、セラピーの経過や CI との関係包括的な枠組みから理解することに重きを置いている。

一般的な SV の論文は、SV を Th の自己成長や支えとして重要であるとは述べている。しかし、主眼は CI への Th としての仕事、すなわちカウンセリングの十分な質を維持することや、カウンセリングの経過の治療的な価値を高めることにあり、スーパーバイザー（以後、バイザー）個人の Th としての能力の開拓は、目的としては副次的なものである。つまり、バイザーの責任はバイザーの仕事ぶりを管理することである。なかには、SV の中心テーマは（※バイ

ザーではなく）CI であるべきだ、と述べている論文さえある（Carroll, 1996）。

PCA のスーパービジョンの観点

PCA の観点から SV について書かれている文献の特徴として、バイザーがセラピーでどのような体験をしたのか、および、その専門家としての能力をバイザーとの関係を通じていかに発展させるか、に焦点を当てることがある。一般的な論文と対照をなすのは、バイザーとバイザーの依って立つ学派の合致を重視している点である。バイザーの共感・受容・自己一致の治療的な質の発展と統合を支えるためには、バイザーと学派が一致していることが重要である。

PCA のバイザーはバイザーに実践上のモデルを示す。これはセラピーの方法を教えることによってではなく、バイザーが自分のスタイルを見つけられるように成長促進的な環境を SV 関係の中で提供することによってである。これは PCA セラピーの理論とも一致している。Villas-Boas Bowen（1986）は、このアプローチを形式志向の SV（form-oriented supervision）と区別している。形式志向の SV とは、PCA の特定の応答スタイルを重視し、それ以外の応答を抑制するものであるため、（※一見、PCA 的であっても）個人が自分を方向付け、決定する力をもっていると信じる PCA の哲学に、根本的に沿わないものである。

歴史的な発展

PCA の SV について書かれたもの、特に米国における初期の文献は、訓練中の Th や学生との SV について書かれていた。米国ではバイザーはしばしばトレーナーという役割を負わされるので、PCA のバイザーは関係を通じて、指導・評価という仕事にバイザーの成長を促進させる要素をいかに統合するかが問われていた。

Rogers（1951）は SV の重要性を認識し、学生教育の一部にしっかりと組み込んでいた。バイザーがバイザーに対して受容的で共感的で、誠実な雰囲気を提供することで、バイザーが Th

になる過程で出会う感情や障壁、困難を探索できる風土を作り出せると Rogers は述べている。SV において彼は、その焦点をまぎれもなくバイザーに当て、バイザーの自己信頼や自己理解、およびセラピー経過についての理解がバイザーの中に出来上がってくるよう、バイザーを支えた。

SV について書いた Patterson (1983) もやはり同様の考えを示している。彼は SV における中核条件および、訓練生の感受性や Th 態度の向上を重視した。そして彼が焦点を当てたのもバイザーの体験であり、技法や応答ではなかった。Rice (1980) も SV について書いているが、彼女はバイザー個人としての CI との関わり体験と、セラピープロセスの理解の両方をバランスよくサポートすることを SV と考えていた。彼女の考え方は Rogers や Patterson (1983) とはやや違っていたと言えよう。Process-experiential therapy (※現在の Emotion-Focused Therapy) の創設者であるため、彼女の強調点はどちらかと言うと CI のプロセスの理解と、それに対する Th の関わり方の学びにあり、CI に対するバイザー個人としての体験の省察にはなかったようである。Barrett-Lennard (1998) は Rogers のかつての学生であり、SV を受けている。彼もまた SV を成長的学びとして捉えているが、自分自身に対する意識の進化だけでなく、他人の体験に対する意識も SV を通して進化することを成長と考えている。最近の文献でも SV における関係性、中核条件の適用可能性が更に探求されているが、Lambers (2000) は SV をバイザーの自己一致の促進と定義し、SV において中核条件を提供することを今日の職業的・倫理的意識における重要な取り組みと捉えている。Th の自己一致の向上については Schmid (1997) も“出会い (encounter)”概念を SV 関係にまで拡大して論じている。

Merry (2001) は SV における中核条件の提供を協働的探索のプロセスと見て、SV をある意味で“個人的な研究プロジェクト”と捉えている。Tudor & Worrall (2004) もセラピーと

パーソナリティ変容に関する Rogers の理論に基づき、バイザーとの関係の中でバイザーの一致した共感的態度は、巡り巡って CI に対するバイザーの一致した共感的理解の能力を育成すると述べている。彼らは更に、Rogers (1958) のプロセス概念をバイザーの成長プロセスに当てはめている。

体験的療法の立場からは Baljon (2002) がフォーカシング概念を用いて“自己一致を教える”場として SV を論じている。また、Madison (2004) はバイザーが体験のプロセスに触れることで、いかに内省力を高め、CI との関係において自分自身の応答や反応をより深く感じられるようになるかを論じている。

スーパービジョンにおける関係性

SV 関係の力動はあまり研究されていない。SV という言葉自体、支配や監視、力の不平等を含むものであるため、PCA の哲学とは根本的に合わない、と批判されることがある。Mearns (1991) は、バイザーとバイザーの間に横たわっている暗黙の関係性に注目し、その関係の中で出来上がってきた規範や期待について、双方の間で時間をとって検討すべきであると論じている。彼は‘健康な SV 関係’というものを定義し、それは、バイザーが真剣な関わりの中で自己一致し、バイザーに対して共感と一貫した肯定的評価を提供する場合だと述べている。つまり、バイザーがバイザーのありのままを個人としてもプロとしても尊重し、なおかつ新たな視点を提供もするという、‘支持的な挑戦者’になる場合である。同種の挑戦については Kilborn (1999) や Auckenthaler (1995) も言及しており、支持的な SV 関係をもち、同時に批判的な検討を行う、という2つの組み合わせは‘過ちも糧となる’という体験となる。それは、バイザーもバイザーも間違いを認識でき、積極的に探索し、個人として責任をもって学びを得ることができる場である。

SV 関係については、バイザーの立場からも

バイジエーの立場からも、個人的な体験を書いたものは極めて少ない。バイジエーとしての個人的体験を書いた Moore (1991) と Gibson (2004) は共に、深く傾聴してもらい、Th としての自分のスタイルを探ることを温かく励ましてもらった体験が、SV の大きな意味であったと述べている。

その点、Jacobs (1996) は注目すべき論考をしている。つまり、バイジエーが SV において CI との関係にバイザーから注意を向けられ、自分自身についての気付きを得ることが、セラピーの中で自分と CI 双方の相互の自己一致を深め、2 人の間に横たわる暗黙の関係性についての言語化を可能にするというのである。

Th の経験に焦点を当てる

ここまで見てきた文献に一貫しているのは、PCA の SV は、バイジエーが治療関係の中で自己一致し、統合され、そして十分に存在 (fully present) するように成長することを目的とする、ということであった。SV の中心にあるのは、CI に焦点を当てたケースの検討ではなく、Th が CI との関係を内省し、その関係の中でより自分自身になること、である。Rogers (1957) も SV を同じように考えているが、それに関連して、自分はバイジエーの Th モデルにはなりたくない、と言っている (Villas-Boas Bowen, 1986)。

SV 関係は、バイザーが自分の CI との関係とそこから生起するプロセスについて気づきを得て、治療作業に必要な関係性の質を探索できる環境である。バイジエーが CI との間で感じる、魅了されたり嫌悪したり、怒ったり、愛を感じたり、絶望したり、といった様々な経験を、SV では考える。そこには殆ど象徴化されていない経験も、馴染みのある経験も、新奇な経験もある。それらの経験に対してバイジエーが自分を閉ざすことなく、CI に対して深く関わられるようになることをバイザーは目指している。しかし間違っ

たバイジエーの感情だけではない、ということである。受け入れられるためには感情を語らなければならない、という、焦点の押し付けは価値の条件を作り出してしまふ。SV で扱う経験には (感情だけではなく)、情緒的・認知的・身体的および精神的次元、さらに専門的探求と倫理的な疑問なども含まれている。

SV では様々な方法を試みるとよい。個人的な対話や理論的検討、Th の振り返りメモや日記、ロールプレイ、音声や画像記録などを用いることで、SV が多様で創造的な場になる。Th セッションのテープなど、CI と Th とのやり取りの記録を SV で用いることは、Th にとってセラピー場面の再体験やセラピープロセスの体系的な探索の機会となる。これは、Th と CI とのやり取りを (記憶ではなく) 生のまま扱える唯一の方法である (Mearns, 1997)。

責任と倫理

PCA の SV は 'CI の幸福を犠牲' にしてバイジエーに焦点を合わせるという非倫理性を持っていると非難されることがある。この意見の根底には、PCA の実践に対する誤解もあるが、SV は CI の幸福を保証すべきものだ、という考えがある。また、バイジエーの仕事を監視すると同時に、CI についての診断など臨床的に検討することを通して、バイジエーの能力を査定すべきという考えがある。

治療的实践を検討する視点は 2 つある。1 つは Th の学派を軸にした視点、もう 1 つは社会性・専門性という外側の視点である。外側の視点は文化や社会や専門的職業の準拠枠であり、治療活動を道徳的・法的基準の観点から倫理を定義するものである。どのような学派の Th でもこの基準の中で働く責任がある。PCA の SV ではその職業的倫理の視点と PCA 理論の両方の視点を検討する。

PCA セラピーの枠の中で言えば、その倫理的な実践とは、他者の心理的自由と独自性を深く尊重する姿勢に基づいて、他者との真正な信頼

関係を一貫して提供し続けることである。バイジアーの実践の中にバイザーがこの点に関する懸念を感じる時であっても、バイザーは受容的關係を提供し続ける。それによってバイジアーはCIとの関係でさらに自己一致し、Thとしての機能を模索できるようになる。これがバイザーとしての倫理的な行動であり、バイジアーが倫理的に行動できるようにサポートしているのである。

スーパービジョン関係の質：中核条件の意味

バイジアーがCIとの関係体験の深さを検討するには、バイザーはそのバイジアーに対して高いレベルの関わりとプレゼンスを提供する必要がある。セラピーと同じく、共感、受容、自己一致は相互の信頼と尊敬の風土作りを支える重要な要素である。これらはバイザーとバイジアーが“協働的探索”（Merry, 2001）という創造的作業をするための、誠実な対話ができる関係を作るのに役立つ。バイザーから共感されることで、バイジアーは自分の体験プロセスに入り込み（tuning in）易くなる。よく分からない感覚が起っている時には、フォーカシング的応答が役立つこともある。ただし、既に述べたように、共感感情だけでなく経験や懸念の全てに向けられる必要がある。

バイザーからの受容、すなわち、バイジアーをひとりの人間として尊重する態度によって、バイジアーには、CIとの独自の関係作りのスタイルを自分で見つける能力があるとバイザーが信頼していることが伝わってくる。SVの機能は、Thとしての独自のスタイルを探れるようバイジアーを支援することである。バイザーのその態度は非評価的であるにもかかわらず、バイジアーにとっては刺激に満ちた多くの学びを得るものと感じる。こうしたバイザーの態度は、評価や判断から生じるのではない。自己一致や一貫した受容から生じるのである。そしてそれは、バイジアーがCIとの関係において経験に開かれ、非防衛的に内省し、自己一致した探求を自身の責任において行うように誘い入れる。

自己一致はSV関係において本質的な条件である。CIとの関係の様相が十分に見えてくると、バイジアーはありのままの自分が露呈したかのように感じ、不安定になることがある。そうになると、CIとの関係の中で経験に開かれていたい願望と、自己防衛の欲求との間で葛藤が起きることもあり、自己一致することへの苦しみが襲う。バイザーが自分自身の体験に開かれているならば、の話であるが、バイザーができるのは、バイジアーのプロセスに十分に寄り添うこと、だけである。バイザーの自己一致した受容と共感の表明が関係性に深みと意味をもたらし、それはバイジアーがより存在し（become more present）、自己一致することを助ける。また、それはバイジアーの実践上のモデルにもなる（Lambert, 2000）。バイザーの自己一致はバイジアーの自己内省を促し、評価の主体性を強める。

スーパービジョンかセラピーか？

自分の過去や現在の人生体験、CIとの関係から生じるThの未解決な問題に、Th自身が開かれていることが重要である。なぜなら、Thの未解決な問題は治療関係の障害になったり治療過程を妨げたりするためである。SVは、この未解決な問題にThが気づき、Thの振る舞いや治療関係に対するその影響について考える機会を与える。このように、PCAのSVは、その関係性とバイジアーの成長に重点が置かれているため、セラピーとSVを混同していると言われることもある。ここまでで紹介したPCAのSV論文のほとんどがセラピーとの違いの議論にスペースを割いているが、どれも例外なくSVは治療的であり得ても、セラピーとは明らかに異なる、と捉えている。というのも、セラピーでは、CIは自分の体験のどんな側面も話せるという自由があるのに対し、SVで話題にされることは主にCIとの関係において生起する体験である。したがって、バイジアーにとって重要な未解決なテーマや問題行動のパターン、不安定さなどが露呈しかかった時のことを考えると、バイザー

とバイザーは、SVの目的について明らかにしておくことが重要である。そのようなテーマをSVで扱うことは実りも大きいですが、関係性の境界を管理する責任は双方が共に負う必要がある。

バイザーにとってもSV関係は個人的に大きな課題であり、学びである。多くのバイザーが、SVを自分の個人的、職業的成長にとって有益というばかりでなく、自分の実践にとって大きなプラスになっている、と述べている。

スーパービジョンにおける成長課題

近年、PCAセラピーでは、関係の重要性をより一層強調するようになってきた。Mearns(2005)は、治療同盟のような表層的な関係ではなく、ある特定の深みへ辿り着けるような並はずれた安心感をCIに感じさせる、関係の深みを作り出すことを強調している。PCAのThの課題はこの深みをあらゆるCIに提供できるようになることである(Mearns & Cooper, 2005)。

Thは訓練の初期、与えられた支持的な環境の中で、自分の受容や理解の限界を体験し探索する。体験の深みと関わる能力を高めることは、あらゆるThにとって訓練期間後も一生続く発達課題である。多くの場合、SVだけが自分の体験を他者と共有し、振り返り、そのインパクトを検証し、個人的課題に取り組むことを保証された唯一の場である。訓練期間中のSVは実際のセラピー体験から浮かび上がったテーマを探ることに多くの時間を割かれるのが普通であり、Thの成長に関わる深い意味にまで踏み込む時間は残っていない。それでもSVは、やろうと思えば、継続している自己課題に取り組むことができる。そこでは、バイザーはThの共鳴板である。いや、むしろ、Thが自分で成長課題を設定し、進行具合をチェックし、それを更新することについての積極的なパートナーである。

関係性を重視する療法(re relational therapy)には、関係的SVが欠かせない(Lambers, 2006)。バイザーがCIに深く関わり、ありのま

まの自分でいられることをサポートするためには、バイザーの側に高度なプレゼンスと真実性が必要である。そのような関係を基盤にしてバイザーはCIに対して自由に関わることができ、自分の発達課題をバイザーに方向付けられることなく自分で決め、実行していくことができる。

結論

PCAのSVは、潜在力信頼モデル(a potentiality model)に深く根ざしている。バイザーは、バイザーその人をプロセスとして受け止め、彼らの成長と発展の可能性を信じている。その目的は、カウンセラーがCIとの関係における個人としての経験を内省することを通じて、自己一致と深みで関わる能力を育むことである。そして、協力的なSV関係は信頼、尊敬、受容、共感、そして自己一致が根幹の要素である。あらゆるCIと深く関わる能力を高めることは、Thの継続的成長課題の一部である。PCAのSV関係は、その課題に関わっていくためのこの上ない場を提供する。

Ⅲ. 若干の考察

1. PCAのSVの特徴

上記Lambers(2013)の論文を読むと、PCAではLambersだけでなく他の研究者も、バイザー個人の潜在力を信じ、技法や関わり方を教えるのではなく、中核条件を提供し、そのバイザーが自分で答を見つけるのを支える、という、セラピーと同じ考え方を提示していることが分かる。そこにあるのは、バイザーは自分でそのスタイルを探索する能力を持っているという信頼である。中核条件のうち共感バイザーが自分の体験を探り、気づきを得ることを助け、受容はバイザーが受け入れられなかった体験を受け入れることを促し、自分で独自の関わり方のスタイルを作る能力がある、という信頼のメッセージを送る、という。中核条件のうちでも特に強調されているのは自己一致である。PCAの

SV はバイザーが真実の自分自身になれることを目指すものであり、それはバイザーの自己一致した態度が重要である、という。バイザーもバイザーも間違いを認め合い、バイザー個人にとってフィットする関わり方を積極的に探るという意味で、PCA のSV は協働的探索の場であり、バイザーはそのパートナーである、と位置付けている。

SV は教育方法であるため、このように、バイザーに教えずに共に探る、というやり方は、他の一般的なSV とは大きな対照を見せている。中にはPCA のSV に対する批判もあるという。確かに、その批判は頷けるところがあり、こんなSV で訓練生はケースをやっていきけるのか？ CI はこれでいいのか？ という不安が、筆者ら（中田ら）にもある。しかし、それについては、引用された Moore（1991）や Gibson（2004）を読むと、むしろ、その懸念は杞憂に過ぎないのではないか、と思わせる。この点について更に考えてみたい。

2. 知識を教えずにSV ができるのか？

知識を教えないSV という考え方自体が成り立つのかどうかを、まず考えてみたい。そんなSV など言語道断という人もいるだろう。バイザーに勝手なことをさせてSV と言えるのか？ CI に何かあったら責任は誰がとるのか？ という批判が出てくることは容易に想像がつく。しかし、教えるSV がいいとばかりは言えない事情もある。新しい事例検討法であるPCAGIP法が生まれてきた背景には、従来の教える型のSV でバイザーが傷つく、ということがある（村山・中田，2012）。傷つけるほどではないにしろ、バイザーの意欲を失わせるようなSV が相当に行われているのではないだろうか？ 筆者（中田）が個人的に見聞きした範囲のことであるが、そういう話は巷にあふれている。

PCA のSV ではそのような弊害はほとんど起こらないであろう。しかし、このSV は、そういう弊害を減らすために考案されたのではない。

むしろ、バイザーの優れた潜在的能力を活性化するという考えがある。また、SV やセラピーを“こういうもの”と限定するのではなく、色々なやり方の可能性がある、という考えがある。Lambers の言うように、PCA のSV は一般的なSV と違い、学派をととても意識したものであり、一見、PCA の学派主義の色を押し出しているようであるが、実際には多様性に極めて開かれたものだと言えよう。様々な心理士がその独自の色を発揮していい仕事をしている例が沢山あることや、素人で心理療法の知識を持たない人でも優れた癒し人が数多くいることを考えると、ある一定の知識を教えること、それも、実際には教えるそのバイザーの固有の価値観で教えることは、たとえ、それが傷つきや意欲低下を伴わないとしても、バイザーの優れた能力を余りにも無視した非効率的なSV であると思える。それでも、教えないSV などあり得ない、という人は、むしろ、その人が受けたSV が体験に開かれることのない貧弱な、あるいは悲惨なものだったのかもしれない。実は、SV を受ける体験は、次に自分がバイザーになる時やCI に会う時に、自分が受けたSV 体験と同じような関わり方をすることになりがちである。その意味ではRogers がバイザーのTh モデルになりたくない、と言っているが、それは難しいだろう。Rogers を模倣しようとする動きがバイザーに起こるのは避けられない。

PCA のSV の概念はあり得ても、果たして、それで教育になるだろうか？ というのが次の疑問である。初学者にとってSV で教えてもらえなければ不安になるのではないかと。しかし、この疑問は、心理療法を学ぶためのカリキュラム全体に及ぶテーマである。受動的に知識を吸収する学びが全くないままにTh になることは考えられない。ある程度の知識の学びは必要である。ということは、初学者のこの不安は、受動的な学びと、SV をどのように組み合わせるかの、教育を行う側の問題に起因する。その受動的な学びがある程度完成した時にPCA のSV

を受けることで、バイジエの Th としての成長に資するのではないだろうか。受動的な学びと SV をどう組み合わせるかについての探求が必要である。

あるいは受動的学習が完成しないうちに PCA の SV を受けることもあり得るだろう。その場合には、バイジエが自分の受動的学習の不足を痛感し、しっかり学ぶ意欲が湧くような SV であることが望ましい。全てを SV で学ぼうとするような気持ちにさせる SV は洗脳と余り違わないし、すべてが受動的学習で学べるとするような学習は、人と人との生身の関わりを仕事とする人の教育としては偏っていると言えるだろう。その意味では、PCA のバイザーはバイジエの受動的な学習のことを意識しながら SV をする必要があるだろう。

初学者ならば本稿をここまで読んででもなお、PCA の SV だけで知識面の成長は達成されるのか、という疑問を感じるのではないかと推測する。次のような疑問が湧くであろう。文献や研修による受動的学習だけではどうしても得られない学びがある。やはり SV の場で実際に関わっているケースを通して知識を得ることも、Th としての成長には欠かせない経験ではないか。その際、PCA の SV が教えない SV であるのならば、Th は PCA の SV とは別の SV も受ける必要があるのか？ もしくは PCA の SV の中で二つを両立することができるのか？

今回紹介した Lambers の論文は PCA の SV の、いわば原則論である。そのためか否か、この論文を含めて PCA の SV 理論は、ここに挙げた初学者の疑問に答えるだけの論理を未だ十分に提供していないように思われる。PCA の SV を Th の訓練課程全体の中で受動的な学習と並んでどのように組み込むのか、というテーマと共に、今後の検討課題であろう。

文献

- Auckenthaler, A. (1995). *Supervision psychotherapeutischer Praxis. Organization, Standards, Wirksamkeit*. Stuttgart: Kohlhammer.
- Baljon, M. (2002). Focusing in client-centred psychotherapy supervision: Teaching congruence. In Watson, J. C., Goldman, R. N., & Warner, M. S. (Eds.), *Client-centered and experiential psychotherapy in the 21st century: Advances in theory, research and practice*, 315-324, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Barrett-Lennard, G. T. (1998). *Carl Rogers' Helping System: Journey & Substance*, London: Sage.
- Carroll, M. (1996). *Counselling supervision. Theory, skills and practice*, London: Cassell.
- Gibson, D. (2004). On being received: A supervisee's view of being supervised. In Tudor, k. & Worrall, M. (Eds.), *Freedom to practice: Person-centred approaches to supervision*, 31-42, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Jacobs, M. (Ed.) (1996). *In search of supervision*, Buckingham: Open University.
- Kilborn, M. (1999). Challenge and person-centered supervision - are they compatible?. *Person Centered Practice*, 7(2), 83-91.
- Lambers, E. (2000). Supervision in person-centered therapy: Facilitating congruence. In Mearns, D. & Thorne, B. (Eds.), *Person-centered therapy today: New frontiers in theory and practice*, 196-211, London: Sage.
- Lambers, E. (2006). Supervising the humanity of the therapist, *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, 5(4), 266-276.
- Lambers, E. (2013). Supervision. In Cooper, M., O'Hara, M., Schmid, P. F., & Bohart, A. C. (Eds.), *The Handbook of Person-Centered Psychotherapy and Counselling, 2nd edition*, 453-467, Basingstoke: Palgrave.
- Madison, D. (2004). Focusing-oriented supervision,

- In Tudor, K. & Worrall, M. (Eds.), *Freedom to practice. Person-centred approach to supervision*, 133-151, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Mearns, D. (1991). On being a supervisor. In Dryden, W. & Feltham, C. (Eds.), *Training and supervision for counselling in action*, 116-28, London: Sage.
- Mearns, D. (1997). *Person-centered counselling*, London: Sage.
- Mearns, D. (2005). How I work as a person-centered therapist, *Public lecture at Kansai Counselling Center*, Osaka, Japan, April.
- Mearns, D. & Cooper, M. (2005). *Working at Relational Depth in Counselling and Psychotherapy*, London: Sage.
- Merry, T. (2001). Congruence and the supervision of client-centred therapies. In Wyatt, G. (Ed.), *Rogers' therapeutic conditions, Evolution, theory and practice, I. Congruence*, 174-183, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Moore, J. (1991). On becoming a supervisee. In Dryden, W. I. & Feltham, C. (Eds.), *Training and supervision for counselling in action*, 129-144, London: Sage.
- 村山正治・中田行重 (2012) 新しい事例検討法 PCAGIP入門: パーソン・センタード・アプローチの視点から, 創元社.
- Patterson, C. H. (1983). A client-centered approach to supervision, *Counseling Psychologist*, II(1), 47-53.
- Rice, L. N. (1980). A client-centered approach to the supervision of psychotherapy. In Hess, A. K. (Ed.), *Psychotherapy Supervision: Theory, research and practice*, 136-147, New York: John Wiley & Sons.
- Rogers, C. R. (1951). *Client-Centered Therapy*, Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1957). Training individuals to engage in the therapeutic process. In Strother, C. R. (Ed.), *Psychology and mental health*, 76-92, Washington, DC: American Psychological Association.
- Rogers, C. R. (1958). A process conception of psychotherapy, *American Psychologist*, 13 (4), 142-149.
- Tudor, K. & Worrall, M. (Eds.) (2004). *Freedom to practice. Person-centred approach to supervision*, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Schmid, P. F. (1997). *Förderung von Kompetenz durch Förderung von Kongruenz. Inhaltliche und berufspolitische Aspekte personzentrierter Supervision*, *Person*, 2, 144-154.
- Villas-Boas Bowen, M. (1986). Supervision and empathic understanding. In Haugh, S. & Merry, T. (Eds.), *Rogers' therapeutic conditions: Evolution, theory and practice. Vol. II. Empathy*, 206-217, Ross-on-Wye: PCCS Books.

